

男性保育者の保育職に対する意識¹⁾

—ジェンダー・フリー保育の観点から—

青 野 篤 子

保育職は、性別職域分離が大きい職業の一つである。男性保育者の参入と定着を進めるためには、職場環境の整備や周囲の偏見の除去とともに、男性保育者の保育観と職業的アイデンティティの確立が必要である。本研究は、男性保育者6名に対して保育経験や保育観についての半構造化面接を行い、得られたデータをグラウンデッド・セオリーにより分析することにより、男性保育者の保育職に対する意識を明らかにすることを目的として行われた。その結果、男性保育者は、子どもへの強い関心を抱き、男性保育者のハンディを感じながら、女性保育者とは異なる自分たちの存在意義を追求しており、彼らの存在が保育職の地位や保育内容を変革していく可能性が示唆された。

【キーワード 男性保育者、性別職域分離、ジェンダー・フリー保育】

1999年に制定された男女共同参画社会基本法には、男女が性別に関わりなくさまざまな分野で活躍することが目標の一つとして明記され、以後、男女共同参画社会の実現に向けて、子育て支援、女性の就労支援、女性の理系能力開発など、さまざまな施策が進められている。しかし、社会的活動分野、とりわけ職業における男女の偏りはいまだに解消されていない。職業により男女の比率が著しく異なることを性別職域分離という（中田，1999）。その典型が保育職である。1999年4月男女雇用機会均等法の改正を機に「保母」から「保育士」に職名が変更されて以来、保育職に従事する男性は若干増加したものの、保育者全体に占める男性の割合はいまだに5%にも満たないのが現状である。

このように男性保育者（本研究では、保育士と幼稚園教諭を合わせてこのように呼ぶ）が増加しない理由にはいくつかのことが考えられる。まず、介護・福祉など人のケアをする仕事は伝統的に女性向きの職種だとみなされ、現実にも女性がマジョリティであることから、男性には大きな抵抗を呼び起こす。また、女性の就業は家計の補助という見方があり、女性が多い保育職は賃金も安くおさえられる傾向がある。そこで、主たる家計支持者（一家の大黒柱）を期待される男性は、保育という仕事に興味があったとしても、一生の仕事として選択するのは難しいのである。男性が保育職に参入しにくい理由の第二の理由は、保育職に対するジェンダーのステレオタイプが根強く存在しているということである。保育職は子どもの世話（ケア）をする仕事であり、保育者は女性がふさわしいという社会通念、とくに低年

年齢の保育は母性的な世話が必要のために男性には無理だという偏見がある(中田, 2000)。また、表だって語られることはないが、男性性セクシュアリティが保育という神聖な場所にもちこまれることの不安が現場では聞かれることもある。こういった理由から、受け入れる現場にも参入する側にも「男性の保育」には抵抗が大きいのが実情である。

仮に男性が保育職に参入したとしても、男性保育者に期待される仕事内容と女性保育者に期待される仕事内容は大きく異なり、男性保育者には主に体を使ったダイナミックな遊びや父親的役割、あるいは力仕事や危険を伴う仕事を期待されることが多い(青野・金子, 2005; 中田, 2004)。また、仕事内容だけでなく、女性保育者や園長(所長)の男性保育者に対する意識も女性保育者に対するものと大きく異なる。また、男性保育者の存在は、伝統的な保育者(保母)像を大きくゆるがすものであり、周囲の女性保育者や園長は男性保育者の扱いに戸惑いを禁じ得ないという指摘がある(中田, 2004)。保育職は、世間から女性性というジェンダーを基準にしてカテゴリー化されている職業であり、男性保育者の参入により女性の存在意義が危うくなってしまう。このため、女性保育者は「女性保育者の保育」に固執し、男性保育者には「男性保育者の保育」を求め、独自の存在意義を確立しようとするという。さらに、女性の職域が侵されるという女性保育者の不安などが関わっていると考えられる(中田, 2003)。

一方、男性保育者の存在により男性保育者のイメージが揺さぶられ、園長・女性保育者、保護者、子どもといった多くの他者を巻き込み、彼らの期待を変化させ、「保育者」定義を再編成させる契機となり、男性保育者が参入していくことが、保育業界全体の変革につながる可能性がある。つまり、男性保育者が参入していくことによって女性職は永遠に女性職であり続けることはなく、男性保育者の増加と男性保育者の職業カテゴリー解釈の浸透化は、社会的な職業カテゴリーを大きくゆるがす契機となると考えられる(中田, 2004)。青野・玉木(2007)は、男性保育者に対する女性保育者と保護者の期待を調査し、実際に男性保育者がいる園では、女性保育者と保護者は男性保育者の増加を歓迎し、男性保育者も女性保育者とほぼ同等の仕事ができると考えていることがわかった。すなわち、男性保育者が働く姿を見せていくことが、男性保育者に対するステレオタイプの変容をもたらす鍵になると考えられる。

このように、男性の保育職の参入には多くの障壁があるが、その障壁をなくすためには、男性が保育職に参入することを通して自らの「男性保育者」としてのアイデンティティを形成すると同時に、伝統的な「保育者」のイメージを変えていくことが求められる。高嶋・安村(2006)は、近年の男性保育者に関する研究を概観し、男性保育者の存在意義が性別役割分業に基づく資質や役割を超えたところに見出されているとしている。また、中田(2004)は、男性保育者の「保育者」の定義にはシークエンスがあるとし、自らを保育所の父と定義する第一段階、ジェンダーの偏りを是正するものとして男性の視点を取り入れようとする第二段

男性保育者の保育職に対する意識

階、子どもの発達を促す者として保育に関わるようになる第三段階を指摘している。

しかし、そのプロセスは単純ではなく、職場環境、園（長）の方針、女性保育者との関係、男性同僚のサポートなど、多くの要因によって影響を受けることが予想される。とくに、男性保育者が、男性であることのハンディや長所、女性保育者との差異をいかに認識し、保育の経験を通して、保育というものを男性にもふさわしい専門職として位置づけ、自らの職業的アイデンティティを形成していくのか、より詳細な研究が必要である。本研究では、男性保育者が自らの職業として保育の仕事や職務内容をどのようにとらえているのか、また、女性保育者と男性保育者との違いをどのようにとらえているか、保育職の職場環境や労働条件をどのように感じているかを、面接調査とグラウンデッド・セオリーにより明らかにする。グラウンデッド・セオリーの目的は、データに基づくカテゴリー・ラベルの生成を経て文脈固有の理論を発展させることであり（ウィッグ、2001 大家訳 2003）、本研究では、半構造化面接法により得られた質的データから男性保育者の保育観の理論化を試みる。そのことを通して、男性の保育職参入を進めていく上で何が必要なのかの示唆が得られると考えられる。

方法

調査対象者 協力が得られたF市内の法人立の保育園（所）・幼稚園で、さらに個人的に協力が得られた男性保育者6名（年齢： $M=24.8$, $SD=3.4$ ）。なお、対象者の属性は表1の通りである。

手続き 対象者が勤務する保育園で、子どもの昼寝時間中（午後1時～4時の間）に、一人約1時間30分程度の面接を行った。各園から提供された一室で行ない、対象者の許可を

表1 対象者の属性

対象者	年齢	保育歴	結婚の有無	配偶者の就業	子どもの有無	子どもの性別
A	27歳	7年	既婚	有	1人 (2人目出生間近)	男
B	22歳	2年	未婚	—	無	—
C	26歳	2年	未婚	—	無	—
D	30歳	5年	既婚	無	1人	女
E	23歳	1年	未婚	—	無	—
F	21歳	半年	未婚	—	無	—

得て面接内容をICレコーダーに録音した。大まかな質問を投げかけて、できるだけ自由に話してもらうというスタイルの半構造化面接法を用いた。

質問内容 属性に関する質問を行った後、保育という職業について、男性保育者と女性保育者の違いについて、職場環境と労働条件について、以下に示すような質問を順次行い、自由に話してもらった。話が途切れた時には、関連した次の質問を随時行った。

1. 属性

年齢、保育歴、結婚の有無、子どもの有無とその性別について質問を行った。

2. 男性が保育をすることをどのように考えているか

- (1) 保育者になろうと思った動機
- (2) 主に任されている(期待されている)仕事内容
- (3) 仕事でたいへんだと感じること
- (4) やってみたい仕事内容
- (5) 理想の保育者像

3. 女性保育者と男性保育者の違いについてどのように考えているか

- (1) 男性保育者と女性保育者は、それぞれが違う役割を持っていると思うか
- (2) 男性保育者と女性保育者では、それぞれ行うことができない仕事内容があると思うか
- (3) 男性保育者と女性保育者の役割について、園の方針はどうか
- (4) 男性保育者と女性保育者との違いを感じることはあるか、ある場合は、それはどのような場合か
- (5) 男性保育者の数が少ないことをどう思うか。
- (6) 女性同僚や保護者の評価はどうであると感じているか。
- (7) 女の子と男の子の扱いで異なることはあるか、また、それぞれに難しさはあるか

4. 男性保育者にとって保育という職業・職場がどのようなものであれば良いと思うか

- (1) 他の職種と比べて保育者の労働条件はどうだと思うか
- (2) 男性保育者が育児休暇をとることについてどう思うか
- (3) 女性の同僚や上司との関係で、気になることはあるか、それはどのようなことか
- (4) 保育を行っていく上での相談者はいるか、それはどのような人か

分析方法 まず、面接内容を文字に起こし、1文ごとに区切って分析単位とした。それらと比較し、発言の中で保育に関するものをそのまま下位カテゴリーとし、同じ趣旨の発言をした対象者が何人いるか言及者数を調べた。次に、関連のある下位カテゴリー同士に共通する点を見出し、共通点を表わしたカテゴリー・ラベルを付与し、それを上位カテゴリーとした。さらに、関連のある上位カテゴリー同士に共通する点を見出し、共通点を表わしたカテゴリー・ラベルを付与し、それをカテゴリー・グループとした(表2)。

男性保育者の保育職に対する意識

表2 男性保育者6名への面接内容から生成されたカテゴリー

カテゴリー・グループ	上位カテゴリー	下位カテゴリー	言及数
子どもへの関心	子どもが好き	子どもが好き	1
		子どもに励まされている	2
		子どもと遊ぶのは楽しい	1
		子どもが生き生きしているのを見るのがうれしい	1
		子どものことが好きな人が理想	1
		子どもに携わる仕事がしたかった	1
	子どもへの共感	子どもをひきつけることが大切	1
		子ども以上に楽しむことが大切	1
		子どもに好かれるような存在が理想	1
		子どもの気持ちに寄り添うことがたいへん	2
		子どもと一緒に育ち合うような保育者が理想	1
		子どもの目線で保育を行なう	1
		子どもに感じが近い人が理想	1
男性保育者のハンディ	女性保育者の必要性	乳児は男性に対して抵抗がある	1
		乳児には母親の存在が必要だと思う	2
		乳児の保育には女性の助けが必要だと思う	2
		女の子のトイレのお世話は女性が行う	1
		乳児の中には男性に慣れていない子もいる	2
	苦手意識	ピアノが苦手	3
		子どもの状態の把握が遅れる	1
		がさつと評価される	1
		言葉遣いが荒い	2
		心配りについて注意される	1
		後輩（女性）を育てることへの不安	1
		周囲から好奇の目で見られる	1
		力仕事を期待されている	3
男性的役割	父親的役割を行いたい	2	
	大きな動き・活発な動きを期待されている	1	
	(子どもの) 遊び相手であると感じている	2	
	男の子の方が関わりやすい	1	
	園の防犯面での活躍を期待されている	1	

青野 篤子

		男性独自のやり方があると思う	1	
		活発な遊びを女の子にも教えたい	1	
	男性保育者の 地位	保育者は続けられるという認識を作りたい	1	
		長年勤務している男性保育者との出会いがない	1	
		周囲から男性保育者参入による変化を期待されている	2	
		他に男性保育者がいる方が環境に入りやすい	3	
		男性が入っていける入り口作りをしたい	1	
		男性保育者を続けていくことへの不安がある	1	
		賃金が低い	4	
		(女性より) 男性に言われたことの方が受け入れやすい	1	
		育児休暇を取りたい	3	
		性別を越えた保育	専門家としての視点	保育者が自分に合っていると思う
	保育者に性別は関係ない			3
	女性にも力持ち, 男らしい人がいる			2
保護者から良い評価を受けている	1			
自分の子どもと園の子どもに対してとでは接し方が異なる	1			
男性も細かい配慮を行わなければならない	1			
やりがいがある仕事だと思っている	1			
(自分の) 個性を活かした保育を行っている	2			
あまり自分が男だということを感じない	1			
ジェンダー・フリー保育	女性的な遊びなどに対する挑戦		1	
	子どもに対して, 個人の性別より性格を重視	3		
	男女それぞれに, お互いの遊びを経験して欲しい	1		
	(男性でも) 乳児の世話は難しくはない	1		
	乳児の保育を行いたい	1		
	(男性であっても) 生まれたての子どもと関わりたい	1		

結果と考察

男性保育者の保育職に対する意識

男性保育者の語りには直接保育に関わりがない内容も含まれていたが、本研究では、面接内容の中でとくに保育に関する内容に着目して分析した結果、8つの上位カテゴリーに分類することができた。さらに、この8つの上位カテゴリーの分析結果から上位カテゴリーを関連したもの同士でくくり、4つのカテゴリー・グループを作ることができた。以下に、それぞれのカテゴリーとカテゴリー・グループについて述べる。

1. 上位カテゴリー

以下に、8つの上位カテゴリーについて、対象者ごとに関係のある発言を列挙し、最後に考察を行う。〈 〉は面接者の質問、下線はカテゴリーに関係がある箇所を示している。

(1) 子どもが好き

子どもへの親しみ、愛着、好意を表わす内容に対して、このように名づけた。子どもがかわいいという気持ちだけでなく、子どもから元気をもらったり、子どもを扱う難しさから喜びも感じ取っている姿が読み取れる。

Aさん

〈保育者になられた動機ってというのは？〉

ああ、子どもが好きだからってというのが一番だと思うんですけど。あと、自分自身の性格として、あまりその人と…なんて言うんです？関かわるのが苦手なんです。すごい人見知りをするんです。ええ、で、まだ子どもの方が話しやすいとかっていう、なんか大人の方と1対1とかだと緊張するんで、あの、まだ子どもの方がやりやすいのもあって、…(略)…
〈先生が楽しくなさそうな時に、子どもは敏感に気付くものですか？〉

わかりますね。それは。大きいクラスになるとそれはとくに。気づいてはくれますけど、でも、そういう風になんていうんですかね、ちょっと悲しいときとかに気づいてくれることがうれしくて、また立ち直れたりとかもするんです。子どもたちが、あの、声かけてくれたりとかかすることで、あの、うれしくてそれからまた、立ち直れることもあるんで、力はもらってます。

Bさん

〈保育を行なっていく上で一番たいへんだったと思うことはどういうことですか？〉

…(略)…自分の中で一番たいへんなんは食事で。はい。食事がそうで、その次が子どもの気持ちに寄り添うこと。こう思ってるかなと思っても違ったり。たいへんです。はい。たいへんなこと…子どもと、でも、遊ぶのは楽しいんで。はい。ふだんはそんなたいへんだなっていうのは感じないんですけど。

Cさん

〈この仕事をしていて良かった、楽しいと思われることはどのようなことですか？〉

ええと…まあ、こう…ただ僕らの言うことに流されるんじゃないんで…えっと、子ども自身が意思を持ってこうやりたい、何々をしたい、いろいろな遊びを繰り返して、子どもから

これをしたんだっていうのを聞いたとき。うん、まあ…意欲っていうか、そういうのを前に出しているとき、そういう生き生きとした子どもの姿を見たりした時が。

Dさん

<保育者になった動機というのは？>

えっと、まあ話は長くなるかもしれないんですが、えーと、大学に入った時に、まあ子どもに携わる仕事がしたいなって思いました、それでまあ、あの、どんな職業があるかなとか思って、いろんな施設であるとか、まあ保育園もそうだし幼稚園もそうなんですけど、いろんな仕事があるなと思った中で、とりあえずまず資格とか、免許とかとらないと働けないと言うのがあったんで、・・・(略)・・・

Fさん

<どのような保育者が理想であるとお考えですか？>

えっと、そうですね。よく期末に全体で会議があるんですけど、そこでクラスの状況を今は、今やってきたことや子どもたちの様子を発表するんですけど、そのときに、あの、子どもの事を話すときに顔がすごいにこやかになってて、聞いているこっちも想像できて、すごい楽しそうにやってるんだなっていうのがすごいわかって。子どもの良い所や悪い所もあるんですけど、良い所をすっごいうれしそうに話してる先生がすごいなって思ってて、僕もそういう先生になりたいなって思ってます。

<この仕事をしていて良かった、楽しいと思われることはどのようなことですか？>

やっぱり、子どもがわーって寄ってきて、先生って寄ってきてくれるのがすごいうれしくて、それがすごい励みになるというか、がんばろうってなりますね。だから、やっぱり子どもたちと触れ合っているっていうのが一番のパワーですね。やってて良かったなあ、って思います。子どもたちの笑顔を見ると、やっぱり保育士やってて良かったなあって思って。

AさんとDさんは、「子どもが好き」、「子どもに携わる仕事がしたかった」と、子どもと関わることを職業選択の大きな理由としてあげた。また、Aさん、Fさんは、子どもが自分のことや気持ちを気にかけてくれることで「励まされている」と述べた。Bさんは、食事の世話や子どもの気持ちに寄り添うことがたいへんだが、「子どもと遊ぶのは楽しい」ので、仕事が苦にならないと述べている。Cさんは、「子どもが生き生きとした姿を見た時に、この仕事をしていて良かったと感じる」と述べている。Fさんは、「子どもが好きな人が理想の保育者」であると述べている。

5人に共通しているのは、保育の仕事をするに際して、子どもに対する愛情が根幹に存在するということである。そして、子どもへの愛情が保育の仕事を支えている場合と、保育職に従事していく中で子どもに励まされたり、仕事のやりがいを感じるようになる場合があると考えられる。「子どもが好き」であるということは、男性に保育者という職業の選択肢を広

男性保育者の保育職に対する意識

げる要因であると同時に、保育者という職業を続けていく要因にもなっているということが伺える。

(2) 子どもへの共感

子どもに関する発言で、子どもの気持ちに共感でき、子どもから共感を得られる保育者でありたいという希望を一つのグループとしてまとめることができた。

Aさん

<保育を行なっていく上で一番たいへんだったと思うことはどういうことですか？>

一番たいへんなこと？…やっぱり、子どもをひきつけることですかね。話をするにしても、注意をするにしても、やっぱり、子どもを引きつけておかないと、子どもも、あの、興味をもってくれない、あの、話を聞いてくれなかったりするんです。何だこの人は、っていう風に思われたときには、もうその、その子も言っても言ってもそれは入ってこないことで、やっぱりその、興味をもてる人でありたいって思ってる、その引きつけるっていうのがまだ、あの、がんばってやろうとはしてます。まずは引きつけてなんぼかなと思ってる。

<具体的にこういう風にすれば子どもが注意を向けてくれるっていうのは？>

ええ…ひたすら、子ども以上に楽しむことですかね。「あっ、何か楽しくやってる。ちょっと何やってるんだろう」っていう風に、あの、子どもが思ってくれることかなと思うんですけど。だから、子ども以上に日々楽しく過ごそうと思ってはいるんです。負けないぐらいに。はい。

<どのような保育者が理想であるとお考えになりますか？>

理想…男女問わずその、子どもに好かれるような、その、存在でありたいなと思うんですけど。最初にも言ったけど、その、引きつけるような、その、興味を持てるような保育士にはなりたいなと思ってるんです。

Bさん

<保育を行なっていく上で一番たいへんだったと思うことはどういうことですか？>

…(略)…自分の中で一番たいへんなんは食事です。はい。食事がそうで、その次が子どもの気持ちに寄り添うこと。こう思ってるかなと思っても違ったり。

Cさん

<どのような保育者が理想であるとお考えですか？>

理想…うーん…難しいなあ。まず、別に人間として完璧に完成されている人間が良い保育者だとは思わないんだけど、子どもの、たとえば苦しいとか、つらいとか、痛みであるとか、なんかその達成した喜びとか、そういうものを子どもと一緒に共感できるっていうか、そういう、共感できて。じゃあ、子どもがどういうことを考えているかなとか、そういう感性だとか、そう…そういうものを感じさせる人。で、やっぱ、うーん…まあ、で、それ、そういう子どもの姿をちゃんと振り返って、どうだったかな、こうだったかな、じゃあ、自分は

どうするべきだったのかな、というのをちゃんと客観的に見れるような人っていうのを。間違ったことをしてないだろうかな、とか。

Dさん

<どのような保育者が理想であるとお考えですか？>

あー…そうですね…うーん…と…理想の保育者か…やっぱり、理想の保育者っていうのは、うーん…どんな…まあ、そうですね…あんまり考えたことないですけど、…(略)…いろいろな子もいるし、その子はその子を見ながら一緒にこう、なんて言うのかな、育っていけるというか、もちろん育てる面も保育者としては大切だし、そういう技術とか、あの、思いとか考え方とか大切だし、そういうの持っておかないといけないと思うんだけど、やっぱり子どもに教えてもらうとか、そういうやっぱり子どもと一緒に育ちあうような、関係が築ける保育者っていうのが、うーん今自分があんまりそういうのができてないなあと思ったりもするので、そういう意味では理想、理想だなあと、思うんですけど。

<男性保育者と女性保育者の役割についての、園の方針はどうでしょうか？>

園の方針ですか？園の方針はとくにねえ、あの…子ども中心にあの、まあ、子どもの目線でと言うか、そういう保育をしていくのがまあ、園の方針ですので、まあそれができるのであれば男でも女でも、そういうような感じではあるので、とくにF君、男だからこれをしなさいとか、こうあるべきですとか言われたこともないですし。

Eさん

<どのような保育者が理想であるとお考えですか？>

理想…うーん…理想か…うーん…理想…理想か…難しいな、なんじゃろ、理想の、理想…子どもっぽい人、うーん、なんかわからんけど。まあ、さらに気をつけんといけんこといっぱいあるけど、そういう時は、子どもっぽい人、子どもに感じ近いかなっていうので、なるべくそっちの方が、うん…。

Aさんは、保育の中で「子どもを引きつける」ことが重要だと語っており、そのためには「子ども以上に楽しむ」必要があるとしている。そして、子どもを引きつけることにより、子どもに好かれる保育者になることが理想だと考えていた。Bさんは、「子どもの気持ちに寄り添う」ことが課題であり、自分が考えていた子どもの気持ちと実際の気持ちが異なっている事もあると述べている。Cさん、Dさん、Eさんは、子どもの気持ちに共感できる、子どもの気持ちを理解できる保育者が理想だとしていた。

この5人に共通しているのは、子どもの気持ちを尊重して保育を行なっていくことが大切だととらえている点である。子どもの気持ちを理解し、共感しながら保育を行なっていくことは難しいことであるが保育において何より大切なことであり、それができる保育者こそが理想であると考えている。

男性保育者の保育職に対する意識

(3) 女性保育者の必要性

保育における母性的世話の必要性、男性保育者には不向きな部分での女性保育者の存在意義が複数の対象から聞かれた。

Aさん

<まだ行なったことのない仕事内容で今後行なってみたいことは？>

乳児はやってみたいですね。まだ任されたことがないんです。

<それはどういう理由から？>

まあ、あの、子どもがきつと慣れないと思うんです。その、やっぱり、人見知りも多くなるような年齢であつたりとか、まだ、その、母親のその、温かみとかを感じていたいような子どもたちですから。乳児っていうのは。だから、こういうちょっと、ちょっと雑な感じの人間とあんま関わるのはまだかなあとかっていうので、まだなんじゃないかなとは思ってますけど、まあ、実際自分の子どもは育ててるんで、その、育てて育てれないことはないと思うんですけど。

Bさん

<女性だから男性だから、っていう風に性別で仕事内容などに違いが感じられることはない？>

そりゃまあ、いろんな物を運んだりとかはまず、自分らが一番にやったりしますけど。そんな、そうですね。あんまり、でも、0歳児っていっちゃ、ちょっとまずいとこはあります。自分、個人的に。言われたらまあ、入りますけど。

Cさん

<男性が乳児の保育を行うことについてどう思われますか？>

うーん…たとえば、3人の0歳児を見る時に、僕一人で見ると言うのは、正直限界があるかもしれない。その、すごく母性を強く求めている子どもに対して、あの、1対1の関係を作るっていうのは、もしかしたら、こう…子どもにとっては不安を与えることになるかもしれないけども、たとえば、6人とか9人の6人だったら2人、9人だったら3人、0歳児であれば。そんな中で、女性2人と男性1人とか。女性1人、男性1人っていうのだったら、まあ、問題は無いと思うけど。うーん、その、月齢が低い段階の子で1対1の信頼関係を重視するっていうのであれば、母性っていうのは確かに必要だと思うし。

<保育の中で子どもの性別によってやりにくい仕事というのはありますか？>

それはトイレのお世話だったら、あの、たとえばその、担当に出たりとかすると男子トイレ、女子トイレってあるわけじゃないですか。それは僕としては、あの、女子トイレには女の子が入るでしょう、女子トイレに入ってまでお世話するかって言ったら、あれは、今、クラスの担任が2人で、1人が女性なんで、そこらへんは分担できます。

Eさん

<乳児を見るにあたってとくにたいへんだと感じられることはありますか？>

大…乳児…うん、やっぱり、男の子にあんま慣れてない子とか、やっばいるんで、すごい泣いて、うん、泣きすぎて吐いちゃうとかいう子もいるんで、まあ、でもなるべくそれは、これからずっと関わって、行かないと、保育所、集団ってわけだし、僕が見ることもやっぱあると思うんで、やっぱり慣れていかないといけないんで、最初の段階はやっぱ、子どももがんばってもらわんと、もらうし、僕らにも慣れてく保育、そうですね、その子たちが保育所出てからも、男の子と関わる日は絶対あるじゃろうし、やっぱ、どうしても子どもはお母さんが見てるとこ多いと思うんで、だから関わるのがまあ少なかつたりしたら…最初びっくりする、子どももいます、はい。そんで…うーん、かな。

AさんとCさんは、乳児の保育には「母親の存在が必要」だと述べており、女性保育者の有利な点を指摘している。また、AさんとEさんは「男性には慣れない」、「(男性に)慣れていない子もいる」と述べており、乳児の男性に対する抵抗を意識していた。Bさんは、自分が乳児の保育を行なうことに少し不安があると考えていた。Cさんは排泄の世話に関して、「女の子については女性の存在が必要」だと述べていた。

この4人に共通しているのは、保育において女性の存在が重要だと考えている点である。とくに乳児の保育に関しては、「乳児の男性に対する抵抗」、「母親の必要性」を強く意識していることがわかった。これは、家庭で子どもと最も多く接する人物が母親である場合が多く、父親と接する機会、すなわち、男性と接する機会が少ないため、男性保育者は子どもたちが男性である自分に対して抵抗を示すのではないかと推測し、乳児の保育を行なうことに懸念を示しているのだと考えられる。

(4) 苦手意識

保育の仕事の中で、男性保育者自身が苦手だと感じていることにもいくつかの共通点が見られた。それには、保育内容に関することから子どもとのかかわり方について、さらに気配りの面も含まれていた。

Aさん

<理想の保育者は？>

ああ、はい。でも、その、自分の、その、特徴を活かせるようなことは、してみたいと思っているんですが。男だから、その、活発にとかっていうわけでもないし、女の先生だったら得意な、その、活発っていうのが得意な先生もいて、で、男の先生の中にも、その、柔らかいような感じのことが得意の人もおれば、っていうので自分のやっぱ特徴を見つけてそれを伸ばして、それがいかに子どもに関われるかっていうのも、大事なんだなって思う。はい。僕全くピアノが弾けないんですけど、どうにか歌声でカバーしようと思ってて、やっぱり違うところで子どもと関わればと思ってます。

男性保育者の保育職に対する意識

<先ほど、あの女性だったらもっと細かいところに気付くのになっている風に仰っていたんですけども、それはどういった場面でよく感じますか？>

遊んでるときとかも、その、子どもが、その、鼻を出していたりだとか、服が出ていたりとかというのを、まあ、気づかんわけではないんですけど、あの、やっぱり気づくのが早かったりだとか。

<がさつであると評価されるようなことはありませんか？>

そういうことも、たまに聞きますけど。口がちょっと、だれの口癖じゃろか、っていうのを聞きますけど、それをいかにカバーできるかと。

<今、一番、なんかその、保育をする上で困っているというか、なんかぶつかっている壁みたいなものはないでしょうか？>

…壁？ああ、立場がだいぶ上になってきたんですけど。自分の中で（笑い）今度は下を育てないといけないんですけど、こう、下の子は女の子じゃないですか。まあ、男の子でもかなり僕は緊張すると思うんですけど、さらに女の子なんで、こうどういう風に育てていたら良いのかというの。…なので、ねえ、あまりきつく言い過ぎたらいけないかなとか。そこに、やっぱ、そこに性差を感じるかな。・・・(略)・・・

Bさん

<子どもの扱いや子供との接し方などで、同僚から注意を受けるようなことはありませんか？>

あります（笑い）粗いってよう言われるんで。

<保護者の方たちとのことで、気をつけてる点などはありますか？>

気をつけてる点ですか？言葉遣いとかを。自分の…気持ち、あんまりストレートに出んようにっていう風には気をつけてます。

<女性の同僚から注意されるようなことはありませんか？>

ああ、上の人からは、もっとこう細かい気配りをしなさいっていう風にはよく言われるんで、自分も大雑把なほうなんでよくそれでは怒られますね。発表会とかで製作物を、やっぱり自分がメインで一個やることになったんで、作ったんですけど、その作ったやつが「これでやるの？」っていう風に言われて。自分ももう、はい、これで良いと思ってますっていう風に言ったんですけど、「見栄えもあるからもっとちゃんと作り」って言われて、作り直したりとかもあったんで、ほんと細かい気配りができたらいいなっていう風に考えてます。

Cさん

<同僚の方や保護者の方の評価はどのようだとらえておられますか？>

初めはやっぱり奇異の目で見られるというか。頑張って、という声を掛けてくれる人もいれば、こう、預ける親としては男で大丈夫なのか、ということもあるかもしれない。ただ、今の時点では、子ども預けてくれているし。ただ、物珍しいぶん、最初のうちは、えつ、と

思うかもしれないけど、ここで親との信頼関係を作っていくのはその人次第というか、うん、ちゃんと話をしてわかり合えることとか。

Dさん

<男性保育者が行なう保育と女性保育者が行なう保育で違いが感じられるような点はありませんか？>

僕はあんまりピアノは上手じゃないので、やっぱり他の先生と比べてやっぱりあの、音楽的なところは弱いと言うか、うーん、やっぱりあの、ピアノが弾けて子供たちと楽しく過ごしたらどんなにいいものかと常々思いながら、そういうところがやっぱり他の女の先生と言うか、他のクラスの、先生たちのクラスと比べたら、ああそこはちょっと違いがあるなあ、と思うんですけど。うん。それと…そうですね、・・・(略)・・・子どもの目線でものを考えたりだとか、うん…それとかまあ、・・・(略)・・・この子どもの動かし方と言うか、そういうところの力というか技術と言うか、そう言うところはまだまだこれから勉強していかなくちゃいけないし、まあ他のクラスの先生、ベテランの先生たちたくさんいらっしゃるの、その先生たちのクラスを見ていると、やっぱりちょっと違いがあるなあとは思うんですけどね。・・・(略)・・・

Eさん

<男性保育者が行なう保育と女性保育者が行なう保育で違いが感じられるような点はありませんか？>

うーん、違い…感じられる…わからないですけど、女性保育者っていうか、まあ、その先生個人だと思うんですけど、ただ単に自分が、うん、もちろん男だからとか、できることとかあると思うんですけど、そういう延長線上って言うよりは、一人の人みたいな感じなんです、うん…ただ単にたぶん、男性の人は昔からピアノやってる人が少なくて、ピアノを弾けない人が多いみたいな、雰囲気がこう、あるから…それでまあ、なんか、それと一緒に普段とみたいな、と思うし一般社会に女性がたとえば一般企業に入ると、男性と女性でできることが違うとか、違うなんて、いうのがちょっとおかしいとかいうのが言われてるじゃないですか、要は。まあそれと一緒に多分、確かにまあ、ピアノが苦手ですけど(笑)

Aさん、Dさん、Eさんは、「ピアノが苦手」であると述べていた。また、AさんとBさんは、「言葉遣い」について、「きつく言い過ぎないようにしている」、「気持ちが率直に出過ぎないようにしている」と述べた。この他に、Aさんは女性と比べて、自分が「子どもの状況を把握するのが遅い」、女性の後輩を育てていくことが不安であると述べていた。Bさんは、同僚からよく気配りについて注意されるので、もっと気配りができるようになりたいと述べていた。Cさんは、同僚や保護者からの評価において、「好奇の目で見られる」と述べていた。

この5人に共通して言えるのは、「ピアノが苦手」、「言葉遣いが荒い、きつい」、「気配りが

男性保育者の保育職に対する意識

苦手」など、一般に男性的な特徴が保育の場での苦手な部分となっていることである。これらは、現実の社会環境や自己の特性に因る部分があるにも関わらず、男性保育者は自己の能力を、性別による生来的な特性によって制約を伴うものだと考える傾向があるように思われる。

(5) 男性的役割

男性保育者が語った内容の中で、保育の仕事や子どもとの関わりにおいて男性性や男性的役割を期待されたり、自ら意識・実行していることとして、以下のようなものがあげられる。

Aさん

<女性の同僚から注意されるようなことはありませんか？>

一人の保育士として、こうして、こうしてっていうのはいろいろいろいろありましたけど。今はおって、その、助かるところもやっぱりあるとは聞きますけど。力仕事であったり、力仕事であったりとか。力仕事であったり（笑い）。

<乳児の男性に対する抵抗というものを感じますか？>

感じますね。たまに0歳の部屋に入りますけど、まあ、まれにですけど。まれに入りますけど、話を聞くとあんまり、その、仕事で忙しくてお父さんと関わってないような子どもは泣きますね。でも、あの、お父さんとよく保育所にも来たりだと関わっているっていう話を聞いている子は、抱っこをせがんでくるとかいうのはあるんで、がんばってお父さん（の役割をしたい）って思うんですけど。

<具体的な仕事内容はどういうことですか？>

遊び相手、それと生活の仕方を・・・あの、伝える。言ってわかってくれるような年ですけど、やっぱりまだ、見て、あの、覚えるって言うのが一番強いと思うんで、あの、耳からよりも目から入ってくる情報の方が子どもたち凄いいじゃないですか。だから、一緒に掃除をしてみてもうやってするんだよって言って教えたりとか、食べるのもこうやって食べるんだっていうのは、あの、子どもに負けないくらい食べてますから、僕も。

<保護者の方の評価はどのようであると感じておられますか？>

どういう風に思ってるんでしょうね。でも、その、やっぱり、4、5歳を最近よく持っているんで、そういう大きいクラスでの、その大きな動きとか活発な動きとかで求められることは、保護者の方に求められることはよく感じます。あの、遊びをいっぱい、今サッカーやったりとか、野球もやっているんですけど、そういう男の子だけじゃなくて、女の子とかもしても良いし、いろんなその、動きの大きな、あの、遊びとかをやっている、それを良いつては言ってもらってますけど。

Bさん

<性別で仕事内容などに違いが感じられることはありませんか？>

そりゃまあ、いろんな物を運んだりとかはまず、自分らが一番にやったりしますけど。そ

んな、そうですね。あんまり、でも、0歳児っていっちゃ、ちょっとまずいとはあります。自分、個人的に。言われたらまあ、入りますけど。

<まだ小さい子のお世話などには戸惑いがありますか？>

そうですね。あの、どっちかっていうと、体を動かして遊びたいっていうのもあるんで。

<男の子と女の子では接し方で気をつけている点や異なっている点がありますか？>

男の子、女の子で、っていうよりは、やっぱり個人差。この子にはやっぱりきつく言ったらいけんっていう子とか、この子にはやっぱり一回ちょっときつく言って、困ってからちょっとこう励ましてやった方がええなという風なことを言ったりだとか。だから、とくにこう男性、女性、男の子、女の子っていう風には考えてないですけど、やっぱり、自分が男の子、男性なんで、そういうサッカーとか、そういうのをする男の子の方が関わりやすいっていうか、楽しいっていうのはあります。

<他にも男性保育者の方がいると励まされますか？>

そうですね。やっぱり、目標っていうか、男性独自のやり方っていうのがあるじゃないですか。そういうのをやっぱり、見ることができるんで良かったですね。自分以外におってくれるのは。大先輩なんで。

Fさん

<任されている仕事の内容、もしくは期待されていると感じる仕事の内容というのはどういうことですか？>

そうですね。今、2歳児の先生をしてるんですけど、えっと、力仕事っていったらあれなんですけど、この前運動会があって、サーキットを組む時に肋木(ろくぼく)とかすごい重たいものを運ぶっていうか、そういうときには自分から買って出て、「はい。します」って言ってそういう仕事もしたり。お話をモチーフにクラス競技をしたんですけど、ライオンが出てきてそのライオン役をやったり、そういう子どもたちと関わる中での、男の人っていうのを活かした遊びとかをしています。そういったところも、他の先生からもちょっと期待されているっていうか、やっぱり男の子だからこういうこともしたら、子どもも喜ぶんじゃないっていう考え方をしてらっしゃって、やってみたらどう、ってこう助言出してくれます。

<男性保育者がこれからもっと増えていけば良いと思われませんか？>

そうですね。やっぱり、今ね、世間はちょっと怖い世間ですからね。やっぱり、不審者とかも、不審者の対応の避難訓練とかもあるんですけど。そういうのをしたりしてるから、1人男の人がいると、そんな人も寄ってこないかなって。ここには男の人がいるなあ、みたいな。そんなのがあって近寄ってこないとか。いるだけでそういう面があるっていうのは、良いと思うから、各園1人とかそういうのではないけれども、いた方が周りも安心するかな、と思います。

男性保育者の保育職に対する意識

Aさん、Bさん、Fさんは、周囲から「力仕事」を期待されており、そういった仕事は自分たちがまず率先して行なうと述べていた。また、AさんとBさんは、「父親的役割」を行ないたいと考えていた。さらに、この2人は自分たちのことを、体を動かして遊ぶ、子どもたちの「遊び相手」ととらえていた。とくにAさんは、保護者から「大きな動き・活発な動き」を期待されていると述べており、自らも「女の子にも活発な動きを教えたい」と活発な遊びに対する意欲を見せていた。Bさんは、同性である「男の子の方が関わりやすい」と考え、保育のやり方も男性保育者には「男性独自」のやり方があると考えていた。Fさんは、男性が園にいることで、「園の防犯」面で役に立てることがあるのではないかと考えていた。

この3人に共通しているのは、自分を男性とみなし、その性別の特性とされる部分を活かした保育内容を実践し、役割を果たそうとしていることである。すなわち、自らの男性的ステレオタイプに従って、男性性を活かした役割を果たすことに意義を見出している。

(6) 男性保育者の地位

男性保育者が、保育を一つの職業としてどのようにとらえているのか、すなわち、少数派であることのデメリット、保育職の社会的地位、労働環境などに関しては、多くの葛藤があることが明らかになった。

Aさん

<若い世代のために入りやすい環境にしたいと思うのですか？>

それは、あの、入りやすい職業にしたいなと思いますけど。はい。だから、自分がここで何年も続けていくことで、あの、男の子も「ああ、保育士は続けられる職業なんだな」っていうのをわかってもらいたいですし、その、保育のその考え方を崩すっていうのはあの、今のところこれで、女性の方がたくさんおる保育が今成り立っているんで、それを崩すつもりじゃなくて自分が入れる、入っていくために入り口を開ける。他の男の子のためにも、とは思います。

<長年勤続されている男性保育者がおられるというのはあまり聞きませんか？>

この（地域）では聞かないですね。でも、まあ、きっと都市部に行けばいるのはいますよね。なんか、そういう本とかを読ませてもらうこともあるんで、40、50の先生もおつてみたいな。（ここ）では…ないですけどね。

<そういう男性保育者の方に会ったことがありますか？>

ないです。はい。

<男性保育者が園に1人の場合と、2人以上の場合とでは違いますか？>

でしょうね。僕も今ここまで続けてこれたのは、同じ●先生がおつて2人でどうしたらよくなつていう、保育をどうしたらよいかとかつていって考えてきたんで。友だちなんです。学生の頃からの。だから、いろいろ話すことができたんですけど。だから、今自分はこうやって続けてこれたっていうのもあるなつて思うんです。

<自由な自分で保育をしたいという風に思われているんですか？>

そうですね。それも一つの個性で、いかに引きつけるかっていうところにつながっていくと思うんですけど、それはその、いろいろ自由にさせてもらってますんで。それがあの、あまり自由にさせてもらえなかったら、閉じこもってしまうかもしれないので・・・(略)・・・保育の方もいろいろさせてもらってるんで、あの、やりやすいです。はい。ただ、いろいろ制約されると、もしかしたら、難しいのかもしれないですけど、続けてくっとかってというのは、多分試してるんでしょね(笑い)。いろいろこうさせてみて、その一つの道みたいなのを作らせようと思ってるんでしょかね。こうあるものだ、っていうのをあまり押し付けられないので、いろいろとやりやすいです。

<女性の職域に入っていくため、崩していくための方策というのは具体的にどのようなものですか？>

まあ、崩すつもりもないんです。その、崩すっていうのは忠実に自分が入っていったらな、その、園の中に。その、今ある保育所でその、女性の考え全部削るとかっていうことではなくって、やっぱり、その男の子が入っていけるか、入るその入り口だけでも開けたらな、とは思うんですけど。

<育児休暇をとりたいと思われますか？>

取れたら取ってみたいです。その、ほんとに生まれたてからあの、ずっと関わってみたいとは思いますが、ただ、仕事もしてみたいんで、あの、毎日一緒にいるのはつらいかもしれないんです。子どもと一緒にずっとおるの。取ってみたいような、取ってみたくないような。良い時期があつてちょうど取れるのであれば、取ってみたい。

Bさん

<同僚の方や園長先生の目は結構厳しいと思われますか？>

所長先生には期待しとる、みたいな風に言われるんで。やっぱり、男性なんで、他の同僚も引っ張っていけるようになれたらな、と思ってますけど。そうですね。もう1年が過ぎるんで。次から2年目なんで。

<複数の男性保育者の方がいらっしゃるということはやりやすい環境になっているんでしょうか？>

そうですね。はい、自分にとっては、過ごしやすいです。

<同僚に男性保育者がいらっしゃると、男性の方によく相談されるというようなことはありませんか？>

やっぱり、男の人のほうが言われたことはとりますね。言われたときのこう、言ってくれたことに対しては自分の中で受け止めやすいっていうか。ずっと中に入りますね。

<一般企業などと比べて労働条件はどうだと感じておられますか？>

そうですね。自分が正規で入ってこれたんで良いんですけど、これがもし、臨時でずっと

男性保育者の保育職に対する意識

続けていくかって言われたら、やっぱり男性っていうのもあるんで、考えますね。そこはちょっと。正規で入れたんで、まあ、他にボーナスも出るっていうのもあるんで、しばらくは続けていけるんだって考えてはいますけど。

Cさん

<他の職種と比べて保育士の労働条件っていうのはどうだと思いますか？>

他の職種って、賃金に関してはそれは低いですよ。えっと、ぼくと同じ大学でまあ、他の企業に勤めてる方とくらべたら、倍ぐらいの差、倍以上の差があると思いますよ。

Dさん

<もっとうしたら、男性保育士が入りやすくなるんじゃないかっていうのはありますか？>

ああ。そりゃやっぱり給料が上がることですかね、給料が上がることと、あの、社会的な認知と言うか。うん…まああの、なんていうかな…そうだね、社会的認知と共に給料もやっぱりまあ安い職、まあ、他の職種はどれくらいもらうかわかんないんですけど。うーん、あんまりこう、なんていうかな、あんまり知られないし、こういう職業が知られてないのもあるし、うん…どんな、ねえ、なんか…うーん…あんまり子ども好きの男性いないんですかね(笑) よう分からないですけど(笑) うーん、まあやっぱり給料が上がれば、それだけ魅力的なあの、職業であるって言うのは男性の人はやっぱり、男の人はあんまりこう、結構、給料とか、ああいうところをすごく求めたりする面もあると思うので、うん…でしょうね、やっぱり、給料が上がるのが一番いいんじゃないでしょうかね。

Eさん

<どうやったら男性の方が保育の職場に入りやすくなると思いますか？>

ああ……まあそこに男の人が元々いたりしたら、きっかけにはなりますよね、もともと働いてて、そしたら、まあ、ばーんってなるしね。いたりしてくれたら、やっぱり他の園と雰囲気がたぶん違うし、知つとるところも男性保育士の人がいたんですよ。…なんで、やっぱり雰囲気は、慣れてるというか、子どもらも慣れとるし……もちろん親も、親御さんもそうだし。まあ一人しか今いないんで、入ったばかりで、うーん…まあ、気使われることもあるじゃろうし、多分俺も気使つとる面もあるじゃろうし、まあ、そういうのが一人おったら違うとは思いますがね。

<ずっと続けていくのは賃金の面で難しいんですか？>

まあ一人だったらどうっていうことは、どうっていうことっていうかそれなりに結婚とか、する、して生活していく…朝やっぱり園にいますけど、そうですね…それでやっぱり、やっぱり保育士だけで、ま、難しいんで、経験(?) 足して、講師なってる人もいっぱいだと、おると思うし、学校の先生になつとる人もたぶんそうじゃろうと思うし、うん、で、勉強して、まあ園長とか、そういう風になつていきたいって人もやっぱりおるじゃろうし、そういう感

じですね、ずっと。他の一般企業みたいに、延々ずっと働いて外で、就職して、退職はずっとそこ、っていう感じでは、うーん…ないかなあ、うーん、状況とか、その人にもよりますけど、はい。

<男性の方が育児休暇をとることについてどう思われますか？>

うん、全然良いと思います。

<ご自身ももし、お子さんが生まれたらとりたいと思われますか？>

それも条件にもよりますね。とれるのであればとる感じ…まあ全然、良いことだとは。

Fさん

<他の職種と比べて保育者の労働条件はどうだと思われますか？>

そうですね。うーん、やっぱり結構長いこと働いてるんですけど、ちょっと安いかなって。

<それも、男性の方が入りにくい要素なのでしょうか？>

そうですね。それもああるかもしれない。

<男性の方が育児休暇をとることについてどう思われますか？>

うーん、全然考えたことないんですけど。全然良いと思うし、そうですね。最近、でも、増えてきてるんですか？そういうの。男の人。

<ご自身ももし、お子さんが生まれたらとりたいと思われますか？>

はい。

Aさん、Eさん、Fさんは、将来的にそのような機会があり可能であれば「育児休暇をとりたい」と述べていた。Aさん、Bさん、Eさんは、園に他の男性保育者がいた方が仕事を続けやすく過ごしやすい環境になる、また、その方が周囲の目も寛大になると考えていた。Cさん、Dさん、Eさん、Fさんは、賃金が安いと感じており、それが男性保育者の参入が進まない要因の一つになっているのではないかと考えていた。AさんとBさんは、「(男性保育者の手本としての)一つの道を作らせようとしている」、「期待されている」と述べ、周囲からの期待を強く感じていた。Aさんは「保育者は続けられる」という認識、「男性が入っていける入り口」を作りたいと述べており、男性保育者が参入しやすい環境作りへの意欲を示していた。また、長年勤務している男性保育者との出会いがないと述べていた。Bさんは自分が男性であるため、ずっと保育者を続けていくことに不安があると述べていた。また、「(女性より)男性に言われたことの方が受け入れやすい」と述べていた。

この6人の話に共通しているのは、現在男性保育者が置かれている環境に対し、今後改善していく余地があるととらえている点である。その中でも最も多かった感想は、他の職種と比べて賃金が低いということである。また、男性保育者が自分ひとりの場合は相談相手がなく孤立しがちになるが、男性保育者が複数いる場合には、周りの態度も受容的になり、仕事を行ないやすいということが語られた。この他にも、ベテランの男性保育者は他の若い男性

男性保育者の保育職に対する意識

保育者にはモデルとなり、働き方、保育の仕方、女性保育者との関わり方など、さまざまな面で要領を教えてくれ、仕事のモチベーションや継続性の面でもポジティブな影響を与えていることが推測される。すなわち、労働条件の改善によって男性が長年勤務できる環境を作り、男性保育者を増やしていくことで、周囲が抱いていた保育者像が変容し、男性保育者自身も保育者としてのアイデンティティを確立できると考えられる。

(7) 専門家としての視点

上述のように、職業としての保育に疑問や葛藤を感じながらも、いずれの対象者も、保育そのものへの関心は高く、保育のプロをめざす姿勢を強く示した。専門家としての視点が現れている言及には以下のようなものがあった。

Aさん

<職業の中で保育が自分に合っていると感じられて、保育者になられたんですか？>

そうですね。まだ、でも、それを思ったのが学生の頃なので、あの、合ってるかどうかっていうのは、まだわからないじゃないですか。とりあえず、やってみようっていうことでやって、意外に合ってるんだな、っていうことは最近感じています。

<男性保育者と女性保育者にはそれぞれ違う役割があると思われることはありますか？>

それも、その人それぞれじゃないかと思います。(性別の関係)はないんじゃないかなと思うんです。あのフォローっていうか、子どもを引っ張ることが好きな先生もおれば、僕は子どもを引っ張るのが好きなんです。先頭に立って、こっちおいでよ、とかって言っているいろつれて回るのが好きで、で、その後でフォローしてあの、ちょっとついて行けてない子を助けるだとかっていう風なところが、得意な先生がいたりだとか。でも、それも女性で引っ張っていくのが好きな先生も、得意な先生もおればっていうので、それも一つの個性であるのかなって思います。

<女性保育者の方がもっとダイナミックな遊びをしたり、力仕事をしていても良いんじゃないかっていう不満などはありますか？>

それは、僕以上に力持ちの人がいるんで。あと男らしい人もいますんで。

<保護者の方の評価はどうだと思われませんか？>

あの、遊びをいっぱい、今サッカーやったりとか、野球もやっているんですけど、そういう男の子だけじゃなくて、女の子とかもしても良いし、いろんなその、動きの大きな、あの、遊びとかをやっている、それを良いつては言ってもらってますけど。>

<ご自身のお子さんをみる時と園の子どもたちをみる時では違うものですか？>

違います。(笑い) えらい自分の子どもには感情の起伏激しくは出ています。甘えさすときには甘えさして、怒るときには怒ります。ここの子どもは、まあねえ、自分の子どもぐらゐに甘えさせるっていうのもちょっとね、難しいんで。それは実際にできてませんけども、まあ、甘えさせてあげたいのも甘えさせてあげたいんですけど。ここの子どもたちを。やっ

ぱり、30対1だとか20対1だとかっていうその、3歳、4歳、5歳になると、そんなに甘える、甘えさせるっていうのがちょっと難しくなるから。難しくなりますね。

<ご自身の子どもたちよりは多少距離を置いた接し方っていうのになるんでしょうか？>

自然と、それは心がけていますね。あまり近づき過ぎてもいけないと思いますし。まあ、近づこうとも思ってませんが。はい。

<どのような保育者が理想だと思われますか？>

その、自分の、その、特徴を活かせるようなことは、してみたいと思っているんですが。男だから、その、活発にとかっていうわけでもないし、女の先生だったら得意な、その、活発っていうのが得意な先生もいて、で、男の先生の中にも、その、柔らかいような感じのことが得意の人もおれば、っていうので自分のやっぱ特徴を見つけてそれを伸ばして、それが如何に子どもに関われるかっていうのも、大事なんだなって思う。はい。

Bさん

<男性保育者と女性保育者でそれぞれが行なうことが難しいと感じられる仕事内容はありませんか？>

とくにはないと思います。力仕事もやっぱり、ここに勤めてる女の人でもしつかやっぱり、できる人も多いと思うんで。細かい配慮も、自分たちもしていかなきゃいけないわけだし。とくに。そうですね、ないです。

<男性保育者と女性保育者に対する園の方針はどのようなものですか？>

自分が就職する時の面接では、とくにこう男性だから女性だからっていうのを考えずに、自分ができることをしていったら良い、っていう風に言ってもらったんで、あの、やっぱり、まだ自分の色っていうんですか。保育の中にもその人個人の色があるんで、自分の色がどういう色になっていくかっていうのを考えつつ、自分がこれやったら楽しいかなっていうのを、子どもと探したいなっていう風に考えて、やっていってる段階なんで。そうですね。自分は、男性も女性もないっていうのが自分の考え方なのかなっていう風に捉えていますけど。ちょっと分かんないです。

Cさん

<保育者になられた動機はどういったことでしょうか？>

ええと、動機はですね。ええと…やりがいがある仕事。やりがいがありますよ。

Dさん

<男性保育者の方はまだ少ないと感じるのですが、それについてどう思われますか？>

ああ、そうですね…まああの、男性…あの、昔に比べたらやっぱり、数も少しずつではあるけど増えてきているようなね、話はきくんですけど、まあ実質うちの園にも男性、まあ園長先生は男性ですけども、まあ保育をしているものの中ではやっぱ僕だけ男性だし。うん…まあそうですね、とくには…あんまり僕も男がって感じないので、ベテランの先生男勝りの

男性保育者の保育職に対する意識

先生がいっぱいいらっしゃるので、うーんそうですね。

Eさん

<男性保育者と女性保育者でそれぞれが行なうことが難しいと感じられる仕事内容がありますか？>

どうじゃろ…あんまそんな男性女性で考えたことがあんまないんで。はい、個人個人で、男性だからできることも、その、思ったりとか、そういうのはあるけどとくに…男性だからってことは、個人かな、って思う。はい。

Fさん

<男性保育者と女性保育者でそれぞれが行なうことが難しいと感じられる仕事内容がありますか？>

Fさんは「いや、そんなことはないと思うんですよ。男の人にも女の人にもできることはあるし、女の人だからこうしなきゃいけないっていうのは絶対ないと思うし、子どもを見るってというのは男も女も関係ないのかなって思ってます。

Aさん、Bさん、Eさん、Fさんは保育者に性別は関係ないと述べていた。また、AさんとBさんは、個性を活かした保育を行なっていると述べていた。Aさんは、保護者から良い評価を受けており、自分でも「保育職が自分に合っている」と感じていると述べていた。Bさんは、男性も細かい配慮を行なっていかなければならないと考えていた。Cさんは、保育職は「やりがいのある仕事」だと感じていると述べていた。Dさんは、自分が男であることを職場の中であまり意識したことがないと述べていた。

この6人に共通しているのは、保育職を性別と無関係の職業であると見なしている点である。保育を行なっていくのは個々人の個性であり、男性、女性といった性別は関係ないと考えている。世間の一般的な見方に反して、彼らは保育という仕事に興味をもち、保育を仕事として選んだと思われる。そして、実際に保育を経験するなかで、この感覚を確かなものにしていっているのであろう。また、彼らの語りの中で性別よりも個性が強調されていたのも特筆すべきことである。

(8) ジェンダー・フリー保育

日常の保育の中で、女兒・男児をジェンダーの枠にはめた扱いをせず、一人ひとりの個性を尊重しようという姿勢が現れている内容、自分自身が男性であることの制約にとらわれず保育の幅を広げようと考えている内容を拾い出すと以下ようになる。

Aさん

<子どもたちが保育者の仕事を見て性別を意識するというようなことはありませんか？>

僕はあやとりしますから(笑い)。だから、ちょっとしたそういう女の子ちつくところも挑戦してみたいってんですよ。だから、できないわけじゃなくて、いろいろあやとりとか

もできるんですけど。

<男の子と女の子との接し方で異なるような点がありますか？>

男の子と女の子？あまり…性別で、っていうのは考えてないんですね。あの、男の子で
もちよっと、その、芯が弱いっていうか、すぐ泣いてしまうよ、とかっていう子もいますし、
女の子でその、強くてリーダー的な感じの子も居ますし、個々ですね、それは。性別でこう
した方が良くなっていうのは、今は考えてないですね。ただ、ちよっとその、もうちよっと
で5歳にあがる子たちなんで、あの、興味も、男と女の違いにもやっぱり出てくるんで、あ
の、発育経過であつたりとか、なんか、脱いでしまうときには分けようとは思ってますけど、
分けてはいるんですけど。あの、男の子が先に身長体重、量るときには女の子はじゃあ、外
で待っとうね、とかってそういうことはありますけど、とくにその他に生活の中でとか、
遊びの中でとかっていうのは、やってないと思うんですけど。やってないですね。

<まだ行なったことのない仕事でこれから行ってみたいという仕事内容はありますか？>

乳児はやってみたいですね。

Bさん

<男の子と女の子との接し方で異なるような点がありますか？>

男の子、女の子で、っていうよりは、やっぱり個人差。この子にはやっぱりきつく言った
らいけんっていう子とか、この子にはやっぱり一回ちよっときつく言って、困ってからちよ
っとう励ましてやった方がええなという風なことを言ったりだとか。だから、とくにこう
男性、女性、男の子、女の子っていう風には考えてないですけど、やっぱり、自分が男の子、
男性なんで、そういうサッカーとか、そういうのをやる男の子の方が関わりやすいという
か、楽しいっていうのはあります。

Cさん

<男の子と女の子との接し方で異なるような点がありますか？>

うーん…男の子、女の子の扱い…うーん…その、やっぱり、遊び方もそれがその周りの環
境のせいとか、それとも、それが本質なのかは分からないけれども、遊び方も正直3歳と4歳
だったら、こう、男の子、女の子で違ってくる。女の子はこれが好きですが、男の子はこれ
が好きですっていうのは、不思議なことに顕著に分かれている。だから、女の子に男の子が
するような遊びも経験して欲しいし、男の子にも女の子がするような遊びを経験して欲しい
っていうことで、そういうことにどうやって持っていこうかな、ってことはしますね。」と語
った。

Eさん

<男の子と女の子との接し方で異なるような点がありますか？>

うーん…うーん…うーん…いや、でも、うーん…関わってるのはやっぱり、男女、するこ
ともとくに…そういうの大事なんかなど。とりあえず今は一人一人見ていってるんで、そん

男性保育者の保育職に対する意識

な男女っていうのはないよね、女の子とかかけっこして遊ぶし、まあ、女の子らしいっていう子もやっぱりいますけど、うーん…そうですね、やっぱり女の子だから、おもちゃとか配膳とか、そういうの思っっても始まらんし、やらんといけんし、子どもも…男性に関わる機会も、増えていけんと思うし。とくに女の子とかで考えとるのはないですけどね。

Fさん

<乳児の世話についてどう思われますか？>

そうですね。そんなに難しいってことはないと思うんですけど、たいへんなのはたいへんだと思いますけど、でも、(2歳児のクラスでも)4月ぐらいだったらまだ食べこぼしとかあったし、それがずっとかなって思えば良いかなと思ったり。そんなにたいへんなことはないかなと思います。

Aさん、Bさん、Eさんは、保育を行なう際、「子どもの性別よりも個性を重視している」と述べていた。Aさんは、自分自身も「女性的な遊び」に挑戦していると述べていた。また、Aさんは「乳児の保育を行ないたい」、「生まれたての子どもと関わりたい」と語り、低年齢児の保育に対して意欲を見せていた。Fさんも、「(男性でも)乳児の世話は難しくないと感じており、男性保育者には保育の中核とも言える「ケア」の仕事に挑戦したいという気持ちがあるのだと言えり。Cさんは、子どもたちに、男の子、女の子の枠にとらわれることなく好きな遊びを経験してもらいたいと考えていた。

この5人の語りから、彼らは保育に「男の子らしさ」、「女の子らしさ」を持ち込むことをせず、子どもの性別よりもその子の性格、個性を重視しようとしていることがわかる。また、一般に男性には不向きと考えられている低年齢児の保育に対しても意欲を示しており、男性が行なうことができる可能性を示唆している。これは、男性の保育者が今まで苦手としていたと考えられていた保育活動(あやとり遊び、乳児の世話など)に進出していくことで、保育の幅が広がる可能性を示していると考えられるのである。

2. カテゴリー・グループ

8つの上位カテゴリーの分析結果をもとに、さらに上位カテゴリーを関連したものの同士でくくり、4つのカテゴリー・グループを作ることができた。まず1つ目に、「子どもが好き」と「子どもへの共感」は、両方とも子どもに対しての関心であると考えられたため、「子どもへの関心」と名付けたカテゴリー・グループとしてまとめた。2つ目に「女性保育者の必要性」と「苦手意識」を、男性保育者が保育において抱えているハンディであると考え、「男性保育者のハンディ」というカテゴリー・グループとした。3つ目に「男性的役割」と「男性保育者の地位」を、男性が保育職の中にいることの意義に関する内容であると考え、「男性保育者の存在意義」というカテゴリー・グループでくくった。4つ目に「専門家としての視点」

と「ジェンダー・フリー保育」を、性別に関係なく行なわれる保育に関する内容であると考え、「性別を越えた保育」というカテゴリ・グループとした。下位カテゴリの具体的内容と言及数、それぞれのカテゴリの関係を示したのが表2である。

全体考察

本研究では、男性の保育職参入を進めていく上で何が必要なのかを、男性保育者がとらえた保育職と保育内容の現状および彼らの期待から明らかにしようとし、半構造化面接法による男性保育者の面接を実施した。具体的には、男性による保育をどのようにとらえているか、女性保育者と男性保育者との違いをどのようにとらえているか、男性保育者の職場環境をどのように感じているかに注目した。

面接で得られた男性保育者の語りの内容から、男性保育者の保育観について、「子どもへの関心」、「男性保育者のハンディ」、「男性保育者の存在意義」、「性別を越えた保育」の4つのカテゴリ・グループを生成することができた。男性保育者の保育に対する意識、位置づけは、保育経験や年齢などによって変化していくと考えられるので（中田，2004）、本研究で対象となった6名の男性保育者の属性に留意しながら、保育に対する意識、位置づけが、以上の4つのカテゴリ・グループ間でどのように変化していったのかを考察していく。

まず、対象となった男性保育者の多くは「子どもが好き」であり、子どもと関わることを目的として保育職に参入していた。そして、子どもへの愛情に支えられて保育職へのコミットメントを強める場合と、保育職に従事していく中で子どもへの愛情が強まっていく場合とがある。このとき、男性保育者は自分が男性であることを意識しているわけではなく、保育を女性の仕事だと考えているわけではない。保育の仕事を保育の専門職だとみなし、「子どもへの関心」があれば、性別に関係なく従事できる仕事だと考えているのである。

しかし、このような自己の性別についての認識や保育職に対する考え方が、実際に女性保育者とともに保育を行なう中で変わってくるのである。それまで、保育職は性別に関わりなく、子どもへの愛情があればできる仕事だと思っていたが、女性保育者の保育を目の当たりにすることによって、男性である自分にはできないこと（苦手なこと、まかせてもらえないこと）に気づかされ、仕事としての保育に疑問を感じるようになるのである。とくに、これは乳児の保育に関して顕著であり、男性保育者に乳児の世話は難しく、乳児の世話ができない自分は一人前の保育者とは言えないのではないかという挫折感を味わうことになる。男性の同僚がいない場合には、こういった「男性保育者のハンディ」といったものを痛烈に感じると言えよう。

そこで、「男性保育者のハンディ」を克服するため、彼らは、自分が保育を行うことの意味、すなわち、「男性保育者の存在意義」を求めようとする。すなわち、自分の性別に起因する男

男性保育者の保育職に対する意識

性を活かした仕事、たとえば、父親的役割、子どもの遊び相手、力仕事などを自分たちの得意分野として積極的に行おうとするのである。自分のジェンダー・ロールと関係した保育を行なうことは比較的容易であり、周囲の期待にも応えることができる。

これがさらに変化して、自分の立ち位置を考え始めるのが、他の男性保育者の存在に触れたときである。男性保育者の先輩、もしくは同僚の姿に触れたとき、今後男性保育者をずっと続けていくためにはどうしたらよいかという疑問が立ち現れてくるのである。このとき男性保育者は、同僚の姿を自分と照らし合わせて、一人の男性として、稼ぎ手、一家の大黒柱として男性保育者の状況をみていると言える。男性保育者は、労働条件、環境において賃金が低いと感じており、それにより参入が困難、持続が困難であると感じていた。

続いて「男性保育者の存在意義」が変容し始めるのは、男性保育者が保育経験を積み重ねた場合である。今回の対象者の中で保育歴が7年ともっとも長いAさんは、「乳児の保育を行いたい」、「女性的な遊びにも挑戦している」など、女性の領域とされる部分に積極的に踏み込んでいこうとしている。これは、保育経験を積むに従って、以前は自分では難しいと考えていた部分に対する自信、余裕が出てきたためだと考えられる。しかし、男性保育者はただ単に女性保育者と同じになりたいと考えているわけではなく、今まで女性保育者が行なっていなかった保育内容や男性としての経験を活かせる領域があることにも気づいている。その結果、男性保育者は、これまでの自身の保育者イメージを変容させ、男性的役割も女性的役割も越えた男性保育者、つまり、「性別を越えた保育」を行なえる保育者をイメージできるようになるのではないかと考えられる。ただ、対象者Fは保育経験が半年であるが、「乳児の保育は難しくない」として、自身が幼少期に乳児と接する機会があったことを挙げていることから、早期に女性的な領域とされる部分に触れていた場合は、社会が持つステレオタイプに影響されることなく、女性的な領域に対して興味を持てるのではないかと考えられる。

以上のように、本研究のデータから読み取れる男性保育者の意識変化は、中田（2004）が指摘した、経験年数とともに、保育職を性別と分離させて考えるようになるとする変化の過程（シークエンス）と類似したものである。しかし、本研究では、グラウンデッド・セオリーにより男性保育者の意識の変化をより詳細にとらえることができたと言える。すなわち、保育職に男性が参入する場合、男性が女性の保育に合わせようとする段階から、自分を男性と見なしながら、女性保育者の良いところを取り込むだけでなく、今まで女性が行なっていなかった内容を新たに取り入れようと試みる段階を経て、さらに経験を重ねることにより、男性保育者のなかで男性的役割と女性的役割が融合され、真の意味で個性を活かした保育ができるようになるのである。このことから、男性の保育職への参入は、保育内容の幅を広げていく上でも、また、保育を男女に開かれた専門職として確立していく上でも、さらに男女平等世代の育成のためにも重要なことなのではないかと考えられる。

引用文献

- 青野篤子・金子省子 (2005). ジェンダー・フリーの観点から見た保育環境 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 685.
- 青野篤子・玉木健弘 (2007). 男性保育者に対する保護者および保育者の期待—男性保育者存在の効果— 日本発達心理学会第18回大会発表論文集, 289.
- 中田奈月 (1999). 性別職域分離とその統合——男性保育従事者の事例から——社会学論集 (奈良女子大学), 6, 285-296.
- 中田奈月 (2000). 男性保育者のライフコース—キャリアの実態— 奈良女子大学社会学論文集, 7, 67-76.
- 中田奈月 (2003). 男性保育士による低年齢児保育の困難 保育士養成研究 奈良女子大学社会学論集, 21, 19-27.
- 中田奈月 (2004). 男性保育者による「保育者」定義のシーケンス 家族社会学研究, 16, 41-51.
- 高嶋景子・安村清美 (2006). 「男性保育者」研究の動向 田園調布学園大学紀要, 1, 139-152.
- ウィリッグ, C. 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至 (訳) (2003). 心理学のための質的研究法入門——創造的な案急に向けて—— 培風館

注

¹⁾ 本研究は、平成 18～20 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号: 18410240 代表: 青野篤子) の助成を受けて実施され、この一部は、日本グループダイナミクス学会第 55 回大会において発表された。研究にご協力いただいた保育園・幼稚園関係者の方々、データ収集と分析にご協力いただいた福山大学心理学科卒業生山川真理子さんに感謝申し上げます。

Male childcare workers' attitude toward child day care:
From the view point of gender-free child day care

Atsuko Aono

Childcare remains a sex-segregated occupation. To facilitate the entering into, and taking root of, men in the field of childcare, in addition to changes in existing equipment of the workplace and a reduction of societal prejudice, the establishment of their own views of childcare and vocational identity are needed. The purpose of this study was to clarify male childcare workers' consciousness toward their work through semi-structured interviews with 6 workers and ground theory approach. The results show that male childcare workers pursue the significance of their existence differently from their female counterparts, and it is suggested that their existence could change the status of childcare workers and the content of childcare activities.

【Key words: male childcare worker, sex –segregated occupation, gender free childcare】